

2011年1月の高江洲講師の講演要旨

2011/03/19 関 聡美様作成

ほあ一の会 2011.1 高江洲 薫講師

「人はどこから来てどこから行くのか」

高江洲薫さんは1990年気功と出会い、気功医学をマスター。獣医として動物を癒す中で独自のエネルギー療法を確立されました。心とからだ、奥深くの魂を癒す総合的なヒーリングを行い、過去から現在にわたっての無意識・潜在意識のプログラムを理解すれば、今の悩みや問題が腑に落ちて今をよりよく生きることができるというお考えから、いままで三千人の過去生リレーディングを行っておられます。

2011年1月の回は、17歳の自分に戻る誘導、光のワーク、萩原優先生との対談、Q&A等をまじえながらの充実した三時間でした。

〈今日とどいたメッセージ〉

今日お集まりの方に、「命の大切さ、そして命は尽きることなく永遠に続くものであることを伝えなさい」というのが、高い存在から今日いただいた最初のメッセージです。

二番目のメッセージは、「どのような原因で死を迎えるかは、問題ではない。さいごまで目標に向かって進むことが人生の勝利者といえる」。

三番目のメッセージは、「あなたにしかできない人生のまっとうの仕方が大切なのです。誰かのようにではない、他の方と比較できないのです」というものでした。

わたしたちは表面的な事柄に追われて生きています。今の時間の中でどう生きたいのか、苦しみを背負いますが、本当の意味がわかったときに、生き方が変わります。

数十年しか見ないならば、神も仏もない世界。自由に豊かに生活している人、飢えに苦しんだり強制労働をさせられている子供が、飛行機で数時間飛んだだけにいる。

超未熟児として生まれてすべての病気を請け負ったような方、あるいは親から虐待されて辛く生きてこられた方もいる。人生の始まりがまったく違うのですが、それは過去生からのテーマがあるからです。

今の自分が行っていることは、偶然ではない。この人生を歩むための目的があるはず。それを知ったとき、命をまっとうする意味が出てくるのではないかと思うのです。

命に関わる体験をされたり、お仕事柄命に携わっている方は、本当の意味でいい加減ではできないという凄みが出てくるんです。それが実は人を救うことになります。何の苦労も苦しみもない方は、真剣味がない。「なぜわたしが、なぜわたしの家族がこんな人生を?」という問いかけが、その人の人生を高めていくのです。

<相手をほめる>

お隣の方を見て、この三時間だけ赤い糸で結ばれたパートナーだと思ってください。いまの教育の中では自分をほめること、相手をほめることをしていません。わたしたちは毎日ネガティブなことを聞かされ続けています。ニュース一つをとっても、事故や事件、人の醜さばかり、ポディブローのように「世の中は暗い、辛い」と教えつづけられて、喜びと希望が持てなくなっている。魂を軽くするために、超ポジティブなことをしていただきたい。

ウソでもいいから、相手を徹底的にほめてください。相手の中の素晴らしさをいっぱい言ってあげる。ちょっとしたほめ言葉ではダメ。「あなたにあえて世界一幸せ」とふだん言わないようなことを言ってあげてほしい。

ちょっと違うと思ったときも、「はい、その通りにします」と言ってください。そうして、ポジティブなエネルギーの循環が始まります。

そして人をほめることはできる方も、自分を認めて褒めることは特に苦手です。自分の素晴らしいところを隠せず恥ずかしながらに言ってもらえませんか。相手の方は「そうそう、その通り」と言ってあげてください。そして、十倍返し。しっかり目をみつめて「あなたはまさしくそのような方です」と言ってあげてください。

<自分の過去>

1984年1月火災事故で、妻と二歳半の娘を亡くしました。野生動物の世話をしたいと思っていて、その念願がかなってアフリカに行き、さあこれからと希望に燃えていたときでした。

一月十九日、大雪が降りました。雪かきをしていたら、小窓の中から家の中の火が見えるんです。一階の居間が火の海、二階に妻と娘が寝ていたので、「早く降りてこい」と叫んだら顔を出しました。風呂の水をかけてもぜんぜん消えない。階段を必死にのぼろうとしても、溶鉱炉のようで、顔が焼けていくのがわかる。真っ暗な中、妻と子供をまさぐりながらからだはわかるけれど持ち上げられない。二階の窓を破って転がり落ちたんですね。

子供も妻も助けられなかった自分を何年も責め続けました。からだの三十パーセント焼け爛れて四ヶ月の重傷だといわれた。からだが痛いことで、ようやく心の痛みが薄らぐんです。

人生においてたいへんな時期にみなさんも思うでしょうが、「なぜ自分が、なぜわたしたちだけが…」と。毎週クリスチャンとして教会へ行き、祈り、ボランティア活動をしてがんばってきたつ

もりでした。「一緒に死ねばよかった」と毎日自分を責め続けました。

「亡くなった人より、残された人が苦しいんだよ。だからもう苦しまないで。意味があるからパパは残ったんだから、パパらしく生きてほしい」とある晩枕元に娘が立って言いました。

今から思い返しても、あのことを体験してよかったなんて思えない。しかし、その体験を無駄にしてはいけない。同じような体験をする人に対して役立つ者にならなければいかならう、というのがわたしの気持ちです。

わたしたちは目標を達成するために、何度も何度も生まれ変わります。わずか数十年の一度だけの人生なんてことはありえない。それがわたしが自分の人生の中で気づいてきたことなんです。

「わたしは何者なのですか？ わたしはどこから来てどこへ行くのですか？」というのは、ずっと離れないテーマでした。1998年インドに向かう中で、飛行機の中で素晴らしい光が降り注いできて、「おまえの使命は過去を解き明かし、未来を語ることだ。横を見なさい」という声が聞こえました。横に座っている人のうしろに、その人の今までの人生が数珠上につながっているのが見えたのです。

過去を解き明かすのは、その人の永遠の流れ、そしてなぜここにいるかを解き明かす方法です。肉体は魂を入れる衣、器です。わたしたちはこの肉体という器を使って体験し、そこでできなかったことを次の生でひとつひとつ体験しながら完成を目指す。だれ一人として欠けることはありません。すべてが平等、わたしたちの魂は消えることはない。自分のやり方・信じる方法で、成長を求めながら体験をしていくことが、この体験でひとつひとつ教えられたことです。

命の大切さ・尊さ、毎日いろいろな方の過去生を見るたびにすごいな、と思います。わたしは人の過去生を見るために努力をして技術を磨いたことはありません。ただ、わたしは「どこから来てどこへ行くのですか、わたしは何者ですか」というのを、十九歳の頃からゴーギャンのようにそれだけを問いつけた人間です。

<動物たちが教えてくれること>

わたしはいろいろな顔をもちますが、週三回、獣医師としてエネルギー治療をおこなっています。この世界を知ってから、ヒーリングというかたちで薬を使わないで治療しています。動物からは本当に教えられます。

今も犬・ネコ十萬頭以上が、飼い主の都合で動物保護センターで安楽死させられています。

死ぬ瞬間でも、「絶対に助けに来てくれる」と彼らは飼い主を信じて待ちつづけている。なぜなら、飼い主はその子たちの最大のヒーローだから。焼却されて煙になっても、彼らは自分たちの家に戻ろうとするんです。

動物たちとコミュニケーションしたけれど、彼らの心には飼い主を恨む気持ちがない。たくさん動物の体験をして、ようやく人間になったものを「万物の霊長」と言うんです。学生たちが、「わたしたちはどうして動物たちと違って、憎みあうのですか」とよく聞きます。「すべての体験をするために、どうしても必要なのです。動物たちの目標は、まず人間になることです。目標になるものにうらみを持つことはない。万物の霊長であるわたしたちは、神聖な存在になることを目指さなくてはならない。

毎日のように生命を奪って食べています。「なぜここまでたくさんの生命、植物や動物をいただきながら、生きていてわたしたちはどうすればいいのですか」という問いに、高い存在のメッセージからいただいたのが、「地球を含めて生命を守るという精神性を高めることが役割です」という言葉でした。

あなたは孤独ではないし、見捨てられていない。ただ、あなたの人生の生き方に沿って歩んでいるので他人と比較しても意味がない。出発点が違うので、比べられません。みんなひとりひとり違うのですが、自分が何に向かっていけばいいのか、自分の人生を最高のものにするためにはどうしたらいいのか、これはわたしたちは逃れられない。

ほあーがんの今日の会をわたしは楽しみにしてきました。「生きるって何だろう、死ぬって何だろう」と、自分の中で本気で体験した方がいらっしやるから。

わたしに使命があるように、一人ひとり使命がある。

それをどう見つけるか。いちばん大切なことかなあと思います。

<十七歳のあなたに戻る誘導>

ゆっくりと目を閉じます。現在の時間は一月十日。ご自分の十七歳の頃を思い出していただけますか。

その頃住んでいた家を思い出すと戻りやすくなります。どんな夢があったのか、が今も続いています。思い出してその一つでも大切にしていいただいたら、また希望が出てくる。やるべきことが見つかったら、どうやっても生きてそれを達成するものなのです。その強さがポイントになります。もし、やる事がなくなってしまうたら、人は生きる意味を見失ってしまう。どんなことをしていたかを隣の赤い糸で結ばれた方にシェアリングしてください。

小さい頃のうちを思い出すと戻りやすくなります。わたしの過去は、何度も動物をやって、シロナガスクジラとして生まれてから人間になり、273回めなんです。来世はインドに生まれかわって、もう一度やるかやらないかです。

みんなが偉大な人生の旅をしています。わずか数十年の体験は、わたしたちの長い人生を三時間の映画だとすれば、わずか一コマになるかならないかどうかわかりません。ただし、その一コマが重要で、どんな映像、どんな記録として残せるかが次のあなたにかかってきます。すべてのものがこうやって人生をつないで、最高の自分を目指しながら山あり谷ありで過ごしています。ある時は絶頂期であるときは苦しいとき。

いま、不幸といわれる方は罰せられたのではなく、自分で選んだ道なのです。どういう状況であっても、他人との比較ではなく自分のベストを尽くせばいい。

途中棄権は困ります。長い年月の中、失敗の道はありません。すべての人が敗者復活戦で、さいごは金メダルを得るのがわれわれの目標です。

記憶は事実でないことが多い。歳とともにいろいろなものが付け加えられたり削除されたりします。「お母さんから愛されてなかった」という方の過去を一緒にさかのぼってみると、涙ながらに「わたしの記憶違いでした」とおっしゃった。「もうすぐ人生を終えるというお母様のところに行き、あなたの娘でよかった、と行ってください」と申しました。そうすると、ほとんど意識がなかったお母様が少し意識を戻して、うなずいてくれたそうです。

<萩原先生との対談>

萩原: わたしは患者さんの力を全面的に信じています。今まで自分の力を信じていなかったり、殻に閉じこもってしまったりした方も、何かきっかけがあって気づいてもらえたら、患者さんは自分を癒せると思います。

高江洲:からだ、心、エネルギー的に総合的な癒しがないと、生命が生かされませんね。

萩原: わたしは患者さんを治せない。治ったとしても、わたしが優れているから治ったのではないのです。治らなかったとしても、それはわたしが悪いわけではないと思うようになりました。わたしたち医療者は良くなった患者さんのことは忘れて、治らなかった患者さんに対して「あのとき自分がこうしていれば、お亡くなりにならなかったのではないかと、二十年・三十年たっても思います。亡くなった方のそばに子供がいたのが忘れられなくて、今でもわたしは、手術の前にお話するときに子供さんがそばにいて、まだトラウマです。

高江洲: よくわかります。それは大切なことで、治したら自分がえらい、というのも勘違い。

しかし、治せなかったら自分の責任というのも違います。

その人自身がどうしようかという世界であって、われわれはその中に入れたい。どこまでその人がその人自身生きたいという状況を解説したり、地図を見せる中で、「ああわたしはこういう生き方をしたい」とその方が納得されれば苦しみが大きく変わってくる。オーラ、過去生リーディング、チャクラという形のエネルギーの状態、過去から持ち込んだプログラムといういわば地図を見せながら理解していただくと、より自分の人生の意味がわかってるかなと考えています。萩原先生と方法論は違うかもしれませんが、考え方は同じです。

さきほど高い存在からメッセージをいただきました。

「がんは心とからだのつながりを強めようとする力です。もっと自分の生き方・望ましい人生を歩みたいという望みから生じる結果なのです。生き方をきわめなさい。あなたの人生を最高のものにしなさい。そうすれば、あなたの望みはかなったものとして解放されるのです」

がんはマイナスのメッセージではなく、からだと心が一緒になった「こうしたいんだ!」という声で、どうしたらいいかを考えさせてくれる大きなきっかけ・力なんです。

萩原:病気のことを考えるとからだに意識が行きますが、それをつめていくと結局心になる。心を見ていくと、魂になると思います。患者さんと話していると、がんはいいものでも悪いものでもない。肉体だけに意識をあわせると、死んだら終わりになってしまいますが、命の永遠性に気づいていただけたら嬉しいなど。

高江洲:わたしは亡くなった人とも話をしますが、日本では死が悪いものとされていて、死後教育などとんでもないですね。チベットや密教では「亡くなったらこうなる」という教育がされています。三日三晩にわたって死者を送る祈りや言葉をささげつづける。

憑依された状態の患者さんがたくさん来ますが、亡くなってどこにいったらいいかわからずからだがないと不安なので、優しい方や助けてくれそうな方のからだの中に入って行くのです。はっきりと「何何さん、あなたが亡くなったことはわかります。でもこれで終わりではないので、ちゃんと戻るべきところに戻ってほしい」と話をして教育をすると、光に帰られる方も多いです。

<Q&A>

Q:父が肺がんで腕から胸にかけての痛みが、モルヒネを使ってもとれません。愛犬が入院中の八月になくなりました。よく愛犬が身代わりになるといいますが・・・

高江洲:お父様のハートのチャクラの傷が見えるのです。お父様がずいぶん自分を責めている。胸の痛みには気持ちの痛みがあるでしょう。

重篤になればなるほど、心の痛みとからだの痛みなのか、境目がなくなってしまう。麻薬を使っても取れないときは、心の痛みのことが多いです。

徹底的にお父さんに寄り添い、「あなたの娘でよかった」と言ってさしあげることで、痛みは軽減します。

「今までのお父さんの人生は、わたしたちにとってかけがえのないものだったよ。わたしたちはあなたのおかげでここまで成長できた。お父さんの娘として最高にしあわせ。どうあっても変わらないよ」と言えるなら、お父様のハートのチャクラはずいぶん癒されると思います。

余命告知をされただんな様に「先生、何を言ったらいいかわかりません。今も許せないこともある。夫に言う言葉をください」という方が来られました。

「あなたとの人生は、わたしにとってどうしても必要だ。これからも必要だ、とってください」と言いました。さいごに言ってもらって嬉しい言葉は「あなたの妻でよかった」「あなたの子供でよかった」です。人生の最後にそう言われたら、その方は人生の勝利者になります。何かの賞をもらったり、出世したとしても、「自分でよかったのか」という答えを求めます。どれだけ自分の身近な人から認められるかどうかなのです。

Q:肺がん患者です。自分がやりたいことと人と望まれることのギャップがあります。今生に生まれてきた意味がまだわかりません。本心を捻じ曲げて生きてきたということが、がんを生んだのかなと思います。家族もいますので、バランスを取るのが苦手です。検査の結果、気持ちが揺れ動きます。

自分の生き方をきわめるのがとてもむずかしいです。

高江洲: きっかけはただ一つです。それを知りたいと始めることです。自分の本当の使命は何なのか、今生生まれた意味を、知りたい、知りたい、と言いつづければ必ずかかいます。わたしは三十年かかりました。知りたいと思うものは必ず知る結果になります。

上を向いて願いつづけてください。